

研究ノート

現代カタルーニャにおける 「エブロ川の戦い」の記憶と継承

渡 邊 千 秋*

スペインでは、フランコ独裁体制を称揚するモニュメント等の公的空間からの撤去を定めたいわゆる「歴史の記憶法」が 2007 年 12 月に施行されて 10 年を迎えようとしている。が、現状では、法律条項の適用をめぐるコンフリクトが絶えない。2017 年 6 月、マドリード市長マヌエラ・カルメナは、フランシスカ・サウキーリヨを長とするマドリード・歴史の記憶コミッショナーの提案を受け、市議会での投票を行った結果として、フランコ独裁体制を称えられる名がついた複数の街路の名称変更に踏み切った。これは政治的には正しいプロセスを経てとられた処置であるのだが、市民の理解を広く得ることができたとはいえないようである。各人がそれぞれの政治的思考に基づいて判断をするなかでは、この撤去処置に反対する人も賛成する人もいる。また長年住んできた自分の現住所が変わり、古い通りの表示板が外されるということに生活上の不便を感じ、抵抗感を抱く市民も少なくない。このマドリードでの例のように、目に見える形で行われるフランコ体制を称えるシンボルの撤去をめぐることは、さまざまな立場からの賛否両論が出されている。

内戦の勝者が残したシンボルを歴史的な負の遺産と考える人々にとっては、それらシンボルを視界から消すことが第一義であり、シンボルの撤去に賛成する人こそが進歩主義者・左派であり、理由はなんであれ撤去に反対する人は保

* 青山学院大学国際政治経済学部教授

守主義者・右派といった評価がくだされることもしばしばである。このような「原理的」な思考は傍目から見ると、まるでスペイン内戦前夜の左右両派のイデオロギー的対立が現代に再来したかのようすら思える。しかしながら、前述したマドリードの例に見られるように、現実にはイデオロギー的対立とはまったく異なる次元で、シンボルの撤去に反対する住民がでている。本稿では、スペイン最長の河川であるエブロ川流域の都市、トルトサの川面にいまでも建つ戦没者記念碑の撤去をめぐる近年の状況に注目し、スペイン内戦の記憶を現代の人々がという受容し、昇華しようと試みているのかを考えてみたい。

エブロ川の戦いにおけるトルトサの位置づけ

1938年7月24日夜の共和国軍の攻撃にはじまる、エブロ川流域で展開された一連の戦闘は、内戦研究史においてはエブロ川の戦い (la Batalla del Ebro) と総称される。一般に、スペイン内戦における最も激しい戦闘が展開された場として認識されており、また共和国軍にとっては、自らの敗北を決定づけた戦いであったとも評されている。

前年の1937年をつうじて、ブルネテ (現在のマドリード州マドリード県)、ベルチテ (アラゴン州サラゴサ県)、テルエル (アラゴン州テルエル県) という地で展開された3つの大きな戦いにおいて敗北を喫した共和国軍は、劣勢に陥った形勢を立て直す必要があった。そのため、1938年4月になって、1927年・1928年・1941年予備役を召集した。くわえて、同年5月には1925年・1926年予備役を、また引き続いて1923年・1924年予備役を前線に召集し、最終的には1919年から1922年の退役兵をも召集した。こうして、1938年春から夏にかけて、共和国軍は20万名に及ぶ兵士の動員を行い、エブロ川流域での戦闘を予期して北東方面軍を強化したのであった。また、エブロ川の戦いを指揮した共和国軍側の指揮官27名のうち、25名までが共産主義者であったとされる。エブロ川の戦いに大きな兵力が費やされた背景には、イデオロギー的にも自負心のある新たなエリート集団が率いる新たな人民軍の戦闘部隊によってフランコ率いる反乱軍の注意をひきつけ、共和国陣営にとっての戦略上の要所であるバ

レンシアが受けている激しい攻撃を拡散させて戦況を一変させたいとする、共和国首相ファン・ネグリンの思惑があったといわれている¹⁾。もしもバレンシアが陥落してしまえば、反乱軍の勝利を早めることとなると理解されていたのは明らかであった²⁾。

1938年7月24日夜から25日明け方にかけてエbro川を渡り反乱軍に奇襲をかけた共和国軍は、当初広い範囲で前線を掌中に入れた。しかしその後、反乱軍の反撃にあって大きく進軍することはできず、戦況は膠着して消耗戦にはいった³⁾。戦いによる疲労や、多くの死傷者が出続けるなか、両陣営ともに、前衛・後衛双方において、兵士の戦意を維持するのは困難で、彼らが敵方へ逃亡したりまた降伏しないよう、軍規を強化する必要に迫られたのだった⁴⁾。3か月以上に及ぶ激戦のすえ、1938年11月には共和国軍が再度エbro川を渡って退却せざるをえない状況が生まれた⁵⁾。この時点で、既に共和国軍の敗色は色濃く、ネグリンは共和国軍を支えてきた外国人義勇兵を主要構成員とする国際旅団の解散式をおこなった。反乱軍を支援するドイツ・イタリアに対して、同様に自らの

1) Stanley G. PAYNE: “Capítulo 13. De Teruel a la batalla del Ebro”, en Edward MALEFAKIS (ed.): *La guerra de España (1936–1939)*. Madrid: Taurus, 1996, pp. 401–405.

2) Víctor HURTADO, Antoni SEGURA, Joan VILLARROYA: *Atles de la Guerra Civil a Catalunya*. Barcelona: Edicions DAU, 2012, p. 18,

3) 共和国軍の戦意喪失を狙ったピラをまくなど、特に反乱軍は敵の弱みにつけこむ心理作戦を展開した。このピラには、たとえば以下のような文言がみられる。「民兵よ：もしもお前の持ち場で耐えるなら、お前には死が待っている。もしも逃げようとするれば、突撃隊や国際旅団の銃弾によって殺されるだろう；不平を言ったりすれば指導者のピストルがお前の命を終わらせるのだ。お前の救いは我々の側に来ることにある。フランコのスペインはお前にパンと赦しを与えよう。我々のキャンプに來い、そうすれば苦しみは終わるぞ。スペイン万歳！」Francisco CABRERA CASTILLO: *Del Ebro a Gandesa. La batalla del Ebro, julio-noviembre 1938*. Madrid: Almena, 2002, p. 509.

4) José Manuel MARTÍNEZ BANDE: *La batalla del Ebro*. Madrid: Editorial San Martín, 1988, pp. 188–192; 200–202.

5) この期間、双方の軍誌には、相手に与えた人的・物的損害が記されている。100人単位、時には1000人単位での負傷者および戦死者の報告が行われた場合もあった。César VIDAL (ed): *Memoria de la Guerra Civil española. Partes de Guerra nacionales y republicanas*. Barcelona: Belacqva, 2004, pp. 1128–1130.

兵士らを撤退させる処置をとるよう国際連盟をつうじて要請するためであった⁶⁾。

エプロ川の戦いでは、開戦以来の大規模レベルで大砲等を集中的に使用した反乱軍に軍配が上がった。そして、この後反乱軍は進軍を続け、1939年2月にはカタルーニャ全域を占領したのであった⁷⁾。エプロ川の戦いで共和国軍は捕虜19779名、死者13275名、負傷者61725名以上をだしたとされる⁸⁾。また反乱軍側でも死者数6500名、負傷者57000名を数えたといわれ、勝者側でも多くの大隊が壊滅的な打撃を受けた⁹⁾。このような点からみると、戦いで勝利をおさめたとはいえ、反乱軍に後にこの戦いの記憶を幾度となく想起するに値するだけの戦略的聡明さがあったという判断はできないであろう¹⁰⁾。

しかしフランコ独裁体制は、内戦終結後25年が経過したのちになってあらためて人々の記憶にエプロ川の戦いを刻み直すことを望んだのであった。そこで用いられたのは戦没者記念碑という、目に入りやすい建造物であった。戦没者記念碑が建立される場所として選ばれたトルトサは、エプロ川をはさんで右岸が反乱軍、左岸が共和国軍の支配領域として、戦線の膠着を経験した地である。現在では、カタルーニャ自治州タラゴナ県に属し、エプロ川両岸に広がる面積219,60平方キロメートル、人口33000人余りが住む小都市である¹¹⁾。タラゴナ県のコマルカ（県内行政区）の1つである低エプロ（Baix Ebre）の主要都市であり、3つの工業団地をかかえる。このトルトサの名を世界に広く知らしめたの

6) François GODICHEAU: *La Guerra Civil en 250 términos*. Madrid: Alianza Editorial, 2005, pp. 80–81.

7) Javier TUSELL GÓMEZ: “La Guerra Civil”, en Javier TUSELL GÓMEZ (ed.): *Historia de España*. Madrid: Taurus, 1998, p. 664.

8) C. VIDAL (ed.): *Memoria...* p. 1129.

9) S. G. PAYNE, “Capítulo 13. De Teruel...”, p. 416.

10) Alfredo GÓNZALEZ RUIBAL: *Volver a las trincheras. Una arqueología de la Guerra Civil española*. Madrid: Alianza Editorial, 2016, p. 198.

11) トルトサ市当局の発表によれば、2017年7月時点で、33898人が居住する。タラゴナ県内では、タラゴナとレウスが10万人の居住者を数える都市であり、第3位以下に名前を連ねる都市の人口は3万人台に減少する。トルトサの人口は県内第4位に位置するが、次点の都市とは僅差である。Ver: <http://www2.tortosa.cat/ciutat/estadistica-habitants/> なお以下本稿における全URLの最終確認日は2017年7月19日である。

は、エブロ川の戦いを記念するためにつくられたグロテスクな様相の巨大なモニュメントであった。

エブロ川の戦いにおける戦没者記念碑建立をめぐる

エブロ川の川面に建立された巨大な戦没者記念碑は、一部の人々にはフランコ陣営・共和国陣営双方の戦没者に捧げられたものと解釈されているが、現実には、フランコ陣営の戦没者を念頭において制作されたものであるといえる¹²⁾。というのも、この戦没者記念碑は、内戦終結 25 年を記念するため、当時タラゴナ市に住んでいた彫刻家ルイス・マリア・サウメルス・イ・パナデスによって、独裁者フランコと彼の戦闘員のためにデザインされたものだからである¹³⁾。戦没者記念碑はエブロ川の「なか」に建造され、現在でも、戦闘で破壊されたラ・シント橋の、川の水流にあらがうかのように残った唯一の柱石を台座として、二つの高低差のある細長いピラミッド型の尖塔が並ぶ。低い尖塔のうえには羽をひろげた鷲がとまり¹⁴⁾、高い尖塔のうえには星を掲げる兵士の像が配置され、またこの尖塔の背後には細長い十字架がかけられている（写真①）。台座には「エブロ川の戦いで栄光を見いだした戦闘員のために」という文言が記されている。（写真②）。

既にくれたように、このエブロ川の戦いの戦没者記念碑が建設されたのは、内戦終結直後のことではなかった。反乱軍の働きでスペインに「平和が到来して」25 年になるのを記念するため、「国民運動」のタラゴナ県委員会が提案して 1960 年代に可能となったことである。人々のあいだで内戦の記憶、特に「平和をもたらした」フランコへの感謝が薄れるなかで計画された大事業であった。建造費 450 万ペセタは、タラゴナ県議会や周辺の都市による拠出金、また諸団

12) Fernando OLMEDA NICOLÁS: *El valle de los caídos. Una memoria de España*. Barcelona: Península, 2009, pp. 309-310.

13) “El jefe del Estado inaugurará en Tortosa el monumento a la Batalla del Ebro”, *ABC*, 18 junio 1966, p. 85. <http://hemeroteca.abc.es/nav/Navigate.exe/hemeroteca/madrid/abc/1966/06/18/085.html>

14) なお、以前は鷲の足の部分には、「聖戦」の勝利者を意味する「ビクトル」のモチーフが付属していた。



写真① エプロ川戦没者記念碑，2008年8月29日，筆者撮影。



写真② エプロ川戦没者記念碑台座，2008年8月29日，筆者撮影。

体や個人の募金によって捻出された¹⁵⁾。

実はこのトルトサにある戦没者記念碑のほかにも、エプロ川の戦いにおける反乱軍を称揚するシンボルは存在した。たとえば、エプロ川の戦いで反乱軍側の司令部が置かれたガンデサのCOL・DEL・MOROには、1953年にモノリスが建造された¹⁶⁾。また1964年にはフランコが国家元首となって25周年を記念するため、使徒サンティアゴに捧げられた礼拝堂が設置された。エプロ川の戦いの戦没者記念碑は、完成すれば前述の2つとならんで3部作のモニュメント群を構成し、エプロ川の戦い全体を象徴するシンボルとなるものとしてフランコ独裁体制側からは期待されていたのであった。

エプロ川の戦没者記念碑そのものは1964年には完成していたようであるが、その落成式が行われたのは1966年になってのことだった¹⁷⁾。1966年6月21日午後、フランコは、トルトサ市長の出迎えをうけて市内にはいった。まずカテドラルでの式典に出席したのち、エプロ川の戦いの戦没者記念碑の落成式典に臨んだ。なお、カテドラルに入るにあたっては、彼のために用意された天蓋(パリオ)の下に入って歩いており、第二バチカン公会議開催ののちも、カトリック教会と体制の協調関係が、少なくとも表立っては大きな変化をみせていなかったことがわかる。このカテドラルでの式典ののち、フランコは妻カルメン・ポロやトルトサ司教マヌエル・モル・イ・サロルドはもちろん、内務大臣、教育大臣、防衛大臣などとともに戦没者記念碑の建造された場所へ向かい、待ち受けたトルトサ市の文民そして軍当局の人々とともに落成を祝った。また戦没者

15) Laura CASAS: “El monumento franquista de Tortosa, huérfano de responsables”, *La Vanguardia*, 22 diciembre 2014, <http://www.lavanguardia.com/local/tarragona/20141222/54421924763/monumento-franquista-tortosa.html>

16) “Derriban el monolito franquista del Coll del Moro en Gandesa”, *La Vanguardia*, 30 mayo 2017, <http://www.lavanguardia.com/local/terres-de-l-ebre/20170530/423046399120/derriban-monolito-franquista-coll-moro-gandesa.html>

17) “Discurso de su excelencia el jefe del Estado”, *La Vanguardia Española*, 22 junio 1966, p. 6, <http://hemeroteca.lavanguardia.com/preview/1966/06/22/pagina-6/32654299/pdf.html>

記念碑はトルトサ司教によって聖別されたのであった¹⁸⁾。

フランコは落成式典における演説のなかで、以下のように述べている。

「われわれの戦争で最も意義深い戦闘は、いっぽうの陣営の勝利を意味するのではなく、すべての国民の勝利を意味するのである。」

「トルトサの人々、全てのスペインの民よ。このエプロ川の両岸をトルトサへ向かって歩み、ガンデサの地を、ガエタの頂点を、サンドルスヤカバルスの山々を奪い合い、そのブドウ畑やオリーブ畑にあまりに多く流されたスペイン人の血があるからこそ、私にはわれわれの戦争の中でもっとも意義深い戦闘から私たち自身が解放されたあの日の感情が再び湧き上がってくる。¹⁹⁾」

これらの言には、この戦没者記念碑が勝者である反乱軍側の戦没者のためにのみ奉げられたものではないと強調することで、国民を団結させようとする体制末期の独裁者の思惑が垣間見える。しかしながら、共和国軍側で内戦を戦った人々や、その家族たちの多くにとっては、これは一方的な主張でしかなく、生き残るために受け入れざるをえない圧力に感じられたことであろう。表面的には賛同以外なにも表明することはできなかつたであろうが、彼らが納得していたとも思えない。この戦没者記念碑は、フランコ独裁体制が自己の正当化をはかるために設置したものであること、戦後の「平和」は反乱軍によってもたらされたものだということをあらためて人々にみせつけるための装置として用いられたと考えるべきであろう。

トルトサ市における 2016 年の住民投票とその結果

独裁者フランコの死後、「国民運動」の財産は全て国の一般財務の管轄下にお

18) “Clamoroso recibimiento de Cataluña al Caudillo en Tortosa”, *La Vanguardia Española*, 22 junio 1966, p. 5, <http://hemeroteca.lavanguardia.com/preview/1966/06/22/pagina-5/32654298/pdf.html>

19) “Discurso de su excelencia...”

かれることとなった。しかしながら、エプロ川の戦いの戦没者記念碑に関しては、スペイン防衛省が自らを記念碑の所有者であるとは認めず、また地域行政も自らが所有者であることを認めないままであった。使用された台座が過去に個人の所有物であったことも、案件のゆくえを不明瞭なものにした。住民の訴えによって、1986年にフランコの勝利を意味する「ビクトル」のシンボルとフランコを直接称揚する「スペインの聖戦と平和の総統へ」という文言は碑から撤去されたが、それ以上の処置はとられることなく、この戦没者記念碑を最終的に撤去する決断はなされないまま、21世紀を迎えたのである²⁰⁾。

2016年3月3日、カタルーニャ自治州議会は、賛成43、反対42、棄権46票でエプロ川の戦没者記念碑の即時撤去をトルトサ市に求めることを決議した²¹⁾。そしてトルトサ市は、この撤去の判断を再度住民に委ねることとしたのであった。

すでに2010年には、市民団体パンシャンブラ民衆の家(Casal Popular Panxampla)が「歴史の記憶法」に基づいてエプロ川の戦いの戦没者記念碑を取り壊すよう、800名あまりの署名をトルトサ市に提出済みであった。しかしカタルーニャ民主集中(CDC)の政治家でありトルトサ市長であったフェラン・ベル・イ・アセンシ²²⁾は、基本的に記念碑を残そうと考えていた。2010年当時のベル・イ・アセンシは、国民党とともに撤去に反対し、この是非を住民投票

20) Laura CASAS, “El monumento franquista...”

21) 通常では、フランコ独裁に反対するという点では高い確率で統一的な見解がみられるカタルーニャ自治州議会の諸政党であるが、この案件をめぐるは一一致した見解を提示することはできなかった。国民党・統一と集中(CiU)は反対票を投じ、シウダダノスは棄権。カタルーニャ自治州選挙のための連合体であるジュンツ・パル・シは内部分裂し、カタルーニャ民主集中(CDC)が反対に、カタルーニャ共和主義左翼(ERC)が棄権にまわった。Àlex TORT: “JxSí divide en el Parlament por el monumento franquista de Tortosa”, *La Vanguardia*, 3 marzo 2016, <http://www.lavanguardia.com/local/tarragona/20160303/40170629210/jxsi-parlament-monumento-franquista-tortosa.html>

22) 2007年以降現在まで、トルトサ市長である。また2011年から2015年の第10立法議会会期においては国会 upper議員、第11立法議会会期から現在の第12立法議会会期までは下院議員を務めている。 http://www.congreso.es/portal/page/portal/Congreso/Congreso/Diputados/BusqForm?piref73_1333155_73_1333154_1333154_next_page=/wc/fichaDiputado?idDiputado=294%26idLegislatura=12

で問おうとはしていなかった。しかしながら、2016年、前述のカタルーニャ自治州議会の決議が出された後では、一定の譲歩をせざるを得ない状況におちいった。政治的駆け引きのなかで、トルトサ市議会では、戦没者記念碑の即時撤去を求める極左政党である人民統一候補（CUP）に対抗して、カタルーニャ共和主義左翼（ERC）は撤去を望まない市長ベル・イ・アセンシを支持することを表明した。ただし条件として、撤去か否かを決定するための住民投票を行うよう求めたのであった²³⁾。この決断は、カタルーニャ全体レベルでのカタルーニャ共和主義左翼の政策方針とは異なるため、物議をかもした。しかし結果として、住民投票は実施され、投票結果に法的拘束力はないまでも、トルトサ市はその結果を尊重することとなった²⁴⁾。

16歳以上のトルトサ在住の住民登録者28000人あまりを対象として、2016年5月28日に住民投票が実施された。投票用紙に印字された内容は、

「フランコが1966年に除幕したエプロ川の戦いのモニュメントに関して、あなたは、市当局は何をするべきだと考えますか。a) 歴史の記憶と平和を進めるために、撤去し博物館におさめるべきである。b) 歴史の記憶と平和を進めるために、維持し、解釈しなおす、またコンテキスト化するべきである。²⁵⁾」

というものであった。投票総数の約68%にあたる5755票が撤去反対を表明し、2631人が撤去賛成に票を投じた。ただし投票率は3割にみたなかった。29,73%しか参加しなかった住民投票の有効性自体を問う人々も存在する。投票に訪れたのは老人だけだ、青年層は住民投票をする意味が見いだせず、と考

23) Roger PASCUAL: “El alcalde de Tortosa apoyará que se mantenga el monumento franquista”, *El Periódico*, 24 mayo 2016, <http://www.elperiodico.com/es/noticias/politica/alcalde-tortosa-votara-mantener-monumento-franquista-5154368>

24) Marc ROVIRA: “Tortosa vota por conservar el mayor monumento franquista”, *El País*, 28 mayo 2016, https://ccaa.elpais.com/ccaa/2016/05/28/catalunya/1464470616_868416.html

25) David LÓPEZ FRÍA: “La última batalla del Ebro se libra hoy en las urnas”, *El Español*, 28 mayo 2016, http://www.lespanol.com/reportajes/20160527/127987470_0.html

られるなどの投票分析が出されてもいる²⁶⁾。

この投票結果が公表されると、マドリード在住の弁護士エドゥアルド・ランス・アロンソは²⁷⁾、エbro川戦没者記念碑の即時撤去が実行されないのを不服として、トルトサ市を相手どって、タラゴナ県の行政係争裁判所に提訴した²⁸⁾。訴状では、トルトサ市長や同市管理事務局長、くわえてカタルーニャ自治州政府内務・公関係相に対して、証言を求めている²⁹⁾。ただし2017年7月現在、本案件に進展がみられた様子はみられない。そして、エbro川の戦いの戦没者記念碑は、以前と同様の場所に設置されたままである。

内戦の「傷」を縫合するために

この戦没者記念碑については、目に触れる場所に残しておきたくないの撤去を望むという声もあれば、エbro川の戦いを忘却の彼方に追いやらないためにも、そのまま残しておく方がよいという声もある。撤去を望まない人の中には、撤去に莫大な工事費がかかるという現実的な点を指摘する人々もいる。

また、撤去を望む人々の意見のなかにも差異がみられる。完全に撤去しすべて破壊してほしい、と考える人もいれば、撤去後は博物館をつくって展示し続けるべきである、と考える人もいる。くわえて、このような博物館づくりをつうじて、観光とタイアップして歴史的事実を広く知らしめることは有効な手段だと考える人々の意向も今後のこの地域の人々の生活に反映される可能性を残している。

26) Silvia BERBIS: “Tortosa mantendrá el monumento franquista del Ebro”, *El Periódico*, 28 mayo 2016, <http://www.elperiodico.com/es/noticias/politica/resultado-consulta-monumento-franquista-tortosa-favor-mantenerlo-5165252>

27) 1984年生まれ、カルロス3世大学で博士号取得。「歴史の記憶」法に関する案件を専門分野とする弁護士である。エbro川の戦いの戦没者記念碑のみならず、他の案件でも「歴史の記憶法」適用を求めて活動する人物である。

28) EUROPA PRESS: “Demanda contra Tortosa por conservar el monumento franquista”, *El País (Cataluña)*, 1 junio 2016, https://ccaa.elpais.com/ccaa/2016/05/31/catalunya/1464712206_491371.html

29) Alejandro TORRÚS: “Denuncian a Tortosa por mantener el monumento franquista más grande de Cataluña”, *El Público*, 31 mayo 2016, <http://www.publico.es/politica/denuncian-tortosa-mantener-monumento-franquista.html>

観光とエプロ川の戦いに関する「歴史の記憶」の継承とをむすびつける動きは既に始まっている。たとえば、2017年7月現在、「かの地(Terra Enllà)」という会社が、エプロ川の戦いに関連する場所への観光ツアーを提供している³⁰⁾。カヤックでエプロ川をくだるプランやワインの試飲のプランとガイドつきの内戦跡地への訪問とを組み合わせるなど、通常の内戦跡地の探索とはひと味違うものが味わえるツアーが組まれている。さまざまなルートが提案されており、エプロ川の戦没者記念碑見学を組み込んだルートもある。これは大人1名11ユーロ、約3時間のツアーで、カテドラルに設けられていた防空壕をはじめ、市街区のラ・プリシマ教会や市庁舎広場、モデルニズム建築のある新市街地、などを訪れたあと、戦没者記念碑を川岸から観察するというものである³¹⁾。実際に、エプロ川デルタ地帯自然公園を訪れる観光客にとっては、大自然に魅了される感動を味わったのち、あらためて内戦の史跡を訪れることで、通常では得られない新たな知見をえる機会となると思われる。

20世紀後半のスペインを代表する作家の1人であるファン・ベネットが共和国軍の戦いぶりを評して、「エプロ川の戦いを遂行することで反乱軍の最終勝利の瞬間を数ヶ月間引きのばした点は再評価されるべきだ」と述べるように³²⁾、敗者となった共和国軍の戦いにも当然記憶にとどめるべき重要なものがある。フランコの死後今日まで、共和国軍の戦いを記念し、その戦没者を悼むさまざまな記念碑やプレートなどが新たに建造されてきた。ただし、共和国軍からみた内戦全体の記憶についてはもちろんのこと、エプロ川の戦いをめぐる記憶をどう後世に伝えるのかについても、共通理解がえられたわけではない。

エプロ川の戦い75周年を迎えた2013年には、1938年7月25日の共和国軍の攻勢にはじまる115日間の激戦を想起するため、一連の行事が組まれた³³⁾。

30) 会社設立は2014年であり、内戦期を専門とするジャーナリストと人類学者によって運営されている。

31) <http://terraenlla.com/la-tortosa-de-la-guerra-civil-visita/>

32) Juan BENET: *La sombra de la guerra. Escritos sobre la Guerra Civil española*. Madrid: Taurus, 1999, p. 123.

33) Silvia BERBIS: “75 años de aquel infierno”, *El Periódico*, 25 julio 2013. <http://www.elperiodico.com/es/noticias/politica/aniversario-batalla-ebro-2530932>

特に国際義勇兵たちに再度注目が集まり、彼らの戦いを記念するさまざまな行事が開催されることとなった。しかしながら、共和国軍の兵士をたたえるという点では類似する行事でありながら、それぞれ主催者や協力団体が異なる行事が複数実施されており、同じ共和国軍陣営側の関係者のあいだで歴史の記憶が分断されている事実が見える。

以下、そのような例をみてみよう。バレンシアの民主的記憶のための市民イニシアチブという団体が中心となり、スペイン人亡命者子孫協会やファン・ネグリン財団、ガンデサ市などの協力を得て、ガンデサで2013年10月19・20両日にエブロ川の戦いにおける共和国軍戦闘員および国際旅団へのオマージュが開催された。講演会のほか、エブロ川の戦い研究センターや内戦博物館を見学した後、激戦が展開されたエブロ川河岸をバスで移動しつつ、ラ・ファタレリャの記念堂を訪れて記念の式典を行うというものであった³⁴⁾。他方、同年10月28日から11月1日にかけて、カタルーニャのロビラ・イ・ビルジリ大学が中心となり、カタルーニャ・マルクス主義者研究協会やスペイン共産党資料室、労働者委員会 (CCOO) や労働総同盟 (UGT) などの労働組合、そしてトルトサを含む周辺自治体の協力を仰いで、国際旅団送別75周年を記念するための行事が開催された³⁵⁾。この折には、マドリードで開催された研究者による講演会に加えて³⁶⁾、バルセロナにあるモンジュイックの墓地を訪れ国際旅団の栄誉をたたえる式典がもたれたほか、エブロ川の戦いにおける戦地を巡りつつ、フリックスやコブレラなどの自治体にある記念碑を訪問するツアーが組まれた。またロビラ・イ・ビルジリ大学トルトサ・キャンパスを会場に、講演会が催され、同大学の学生による研究活動が紹介された。

34) “Conmemoración del 75º aniversario de la batalla del Ebro. Homenaje a los combatientes republicanos y las Brigadas Internacionales”, <http://www.foroporlamemoria.info/2013/10/conmemoracion-del-75o-aniversario-de-la-batalla-del-ebro-homenaje-a-los-combatientes-republicanos-y-las-brigadas-internacionales/>

35) http://www.ccoo.cat/pdf_documents/Programa75aniversario.pdf

36) Foro Por la Memoria: “75 aniversario de la despedida a las Brigadas Internacionales y de la batalla del Ebro”, <http://www.mundoobrero.es/pl.php?id=3140> 10月24日と25日に開催された。

こういった、党派別にエプロ川の戦いの記憶が更新され、また党派別に新たな記憶の場が設けられる現状をめぐっては、異論もでている。たとえば、パナドルス山の標高 705 メートルにエプロ川の戦いを戦った全ての人々にささげる記念碑が建立されたことは、その一例であろう。この地には、毎年 7 月 25 日には「おしゃぶりのキンタ」と呼ばれた、同期に徴兵された人々が集う。現在では 90 歳をこえた彼らのなかには、双方の陣営が甚大な被害を出した戦闘の記憶が次世代に継承されることを望みはしても、エプロ川の戦いの記憶自体が党派性を帯びることを望まない人々もいる³⁷⁾。

党派性をこえた新しい記憶の場の創造を試みる自治体の存在にも目を向けたい。前述したラ・ファタレリヤのレス・カンポシネス農業地区にある記念堂は、内戦がもたらした社会的分断を乗り越え、陣営やイデオロギーの違いをこえて、エプロ川の戦いにくわった全ての人のために建設された。その地で戦うことを余儀なくされた、国籍やイデオロギーなどが異なる 10 名の戦闘員の人生に関する常設展示が設けられ、また一般の人々には訪問を制限している場にはあるが、戦闘員の遺骨をおさめた納骨堂がある³⁸⁾。自治体としてラ・ファタレリヤはこの場をエコ・ツーリズムの一環のなかで紹介し、かつこのスペースが、戦没者にむけられる党派的な称揚をさげ、平和教育のための礎となることを望んでいるようである。

このラ・ファタレリヤスでは、エプロ川流域考古学・歴史学的遺産研究協会「ロ・リウ」が、1938 年 11 月 14・15 両日にわたってフランコ軍の進撃を食い止めた共和国軍第 15 旅団所属の兵士たちの行動を実際に再現し、追体験する行事を、2016 年 11 月 13 日に開催した³⁹⁾。またこの団体は、年間を通してラ・ファタレリヤス周辺の戦闘地へのガイドツアーを組織しており、そこでは共和

37) “Una quincena de excombatientes conmemoran el 75 aniversario de la Batalla del Ebro”, *La Vanguardia*, 25 julio 2013, <http://www.lavanguardia.com/local/tarragona/20130725/54378865073/excombatientes-aniversario-batalla-ebro.html>

38) <http://www.lafatarella.cat/turismo/ES/actividad/memorial-de-les-camposines/35/>

39) “La batalla del Ebro vuelve a La Fatalla”, en *El Periódico*, 13 noviembre 2016, <http://www.elperiodico.com/es/noticias/sociedad/batalla-ebro-vuelva-la-fatarella-5626184>

国軍・反乱軍双方の戦闘の様子について解説が行われる⁴⁰⁾。

このような、内戦の記憶を一端「フラット化する」試みがどういう結果を招くのかは不明である。他方で、先のトルトサの戦没者記念碑撤去をめぐる住民投票の後、撤去しないという決断が下されたことに危機感を抱いたエプロ川流域の市町村が動き始めた。たとえば、ガンデサのコル・デル・モロにあった反乱軍を称揚するモノリスについての対処はその例である。反乱軍が司令部をおいた地に建造されたこのモノリスは、長年にわたる人々の忘却のなかで、左派やナショナリスト、またネオナチによると思われる落書きまみれになっていた⁴¹⁾。自治体としてコル・デル・モロは、モノリス撤去へむけたキャンペーンを展開した。その結果、タラゴナ県議会がモノリスの撤去を決定し、かつ跡地をコル・デル・モロに譲渡することとなったのであった。また、ビラルバ・イ・エルス・アルクスでは、トルトサでの例にならって、中央広場にあるモノリスの撤去の賛否を住民投票にかけることとした⁴²⁾。こうしてみるとトルトサの住民投票は、将来的には歴史の記憶をめぐる自治体のとり組みにとっての分岐点と見なされる可能性をもつだろう。

ひとつ強調しておかねばならないのは、これらのカタルーニャ自治州内の各自治体は、自治体の外からの干渉は受けないということを明確に表明している点である。そのうえで、カタルーニャ自治州政府は、エプロ川の戦いの戦跡等19カ所を文化遺産として指定し、また5つの資料館を設けて、戦いの記憶が喪失してしまうことに対抗しようとしているのだ⁴³⁾。どのような結果が生じようとも、内戦・フランコ独裁の記憶のゆくえを決定する権利があるのは自分たちであるとする地元の人々の主張は、地域の独自性の尊重を求める人々の主張とあいまって、重層的に作用しているといえよう。

40) <http://loriuassociacio.blogspot.jp/>

41) A. GÓNZALEZ RUIBAL: *Volver a las trincheras...*, pp. 198-199

42) A.CABEZA: “La segunda batalla del Ebro”, *ABC* (Cataluña), 12 junio 2016, http://www.abc.es/espana/catalunya/barcelona/abci-segunda-batalla-ebro-201606120129_noticia.html

43) <http://patrimoni.gencat.cat/en/collection/sites-battle-ebro>